

国語科学習指導案

日 時 平成22年11月24日(水)第6校時
 対 象 第二学年C組 44名
 授 業 者 東京都立千早高等学校・教諭・酒井清香
 場 所 三階二C教室

- 1 単元(題材)名 和歌から物語を作る
- 2 単元(題材)の目標

①和歌の魅力や特質を理解しようとしている。(関心・意欲・態度)
 ②和歌の前後の物語を創作し表現することにより、想像力を伸ばし心情を豊かにする。(読む能力)
 ③和歌の解釈に必要な語彙・文法・修辞等を理解する。(知識・理解)

3 単元の評価規準

観点	ア 関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 知識・理解
単元の評価規準	和歌に関心を持ち、積極的に人物の心情や情景を読み取ろうとしている。	語句を正確にとらえた上で、自分なりの解釈を加え、その魅力を表現している。	基本的な語句および文法・修辞等を理解している。
学習活動に即した具体的な評価規準	<p>◆行動の観察</p> <p>①第二時発表 グループで協力しながら、和歌の優れた点や、歌の詠まれた背景など、他の生徒が理解できるよう工夫して発表している。</p> <p>②第四五時グループワーク 自らの考えを伝え、グループの他の感じ方に触れ、物語をより良いものにしようと努めている。</p> <p>◆記述の点検</p> <p>③第六時自己評価表 他のグループ発表のどこが優れていたかを具体的に記し、自己の発表を振り返ることで、単元の学習内容を自分なりに深めている。</p>	<p>◆記述の確認</p> <p>①第一時ワークシート 和歌の解釈に必要な語句・文法・修辞等を調べ、ワークシートに記している。</p> <p>②第三時ワークシート グループで選んだ歌の魅力について自分なりに解釈し、前後の物語を創作する準備として、登場人物や構成を考えることで、和歌の世界に親しんでいる。</p> <p>◆行動の観察</p> <p>③第六時グループの発表 グループで考えた和歌の魅力を劇という発表形式を通し伝えている。</p>	<p>◆記述の確認</p> <p>①第一時ワークシート 和歌の解釈に必要な語句・文法・修辞等を調べ、ワークシートに記している。</p>

4 指導観

(1) 単元(題材)観

古文の授業では、生徒に身に付けて欲しい語彙や文法・古典常識が多くあり、指導者にとって、教えたことばかりであり、その中で言語活動を有機的に取り入れることは難しい。しかし新学習指導要領においても、生徒の国語力を高めるために充実した言語活動を展開することが求められており、授業者が教材研究し生徒に教

授する大きな幹とも言える従来の一斉指導に加え、生徒の活動に留意した、新たな工夫を加えた授業を行う必要がある。

新学習指導要領には、国語総合の(2)言語活動例として、「ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。」が挙げられている。新学習指導要領解説には、「脚本にするという言語活動の前提として、戯曲に触れている必要がある。」とも記されているが、附属高校の生徒たちは、一年で現代劇鑑賞・二年で歌舞伎鑑賞を全員が行っていることと、辛夷祭(文化祭)の中心である三年演劇を観てひとかたならぬ影響を受けている。劇を演じること作ることににおいては、他校の生徒に比べ圧倒的に高い意識を持っている。

以上の点をふまえ、和歌の前後の物語を作り発表するという言語活動を通して、生徒が想像力を伸ばし、豊かな感性や情緒を育むことを目的として、本単元を設定した。歌が詠まれたその場所やその時だけでなく、その前後の物語を想像することで、現代にも共通するものの見方や、古文特有の感じ方・考え方にも思いをめぐらせられるのではないかと考えこの単元を設けた。この単元における一連の言語活動が、新学習指導要領古典Bの「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること」という指導事項とも関連し、生徒の豊かな感性を育むことに資すると考えている。

(2) 生徒観

附属高校の中でも授業に対する取り組みが素晴らしいと評判が高く、何事に対しても真摯な態度で臨むクラスである。加えて、生徒たち自身もクラスが良いという自負をもっており、授業だけでなく行事などでも良い結果を残している。

第二時の発表においても、各グループが個性を持った発表をし、授業者の想定を超える素晴らしい発表が多かった。

しかし第三時に行った物語の構成を考える作業では、多くの生徒が難渋し、なかなか作業が進まなかった。歌の解釈を大切にする真面目さからか想像力を働かせることが難しく、自由に物語を創作することに苦手意識を持つ生徒が多いことがわかった。

本単元で、和歌を的確に理解することだけでなく、そこから発想を広げることも大切であることを感じさせたい。

(3) 教材観

教材は、東京書籍『古典』(古文編)に採録されている「王朝秀歌」とした。代表的歌人の歌が採録され、多様な修辞を駆使した王朝時代の優れた歌の世界から、豊かな言語表現に触れることができる教材である。その十五首を出席番号順に三人で調べ発表する活動と、その後、五、六人のグループに分かれ、十五首の中から好きな歌を選び、その物語を創作するようにした。

なお、第一時は、学校図書館との連携および、ノートパソコンを使用し、語句の意味や文法、歌の背景などを調べた。

5 年間指導計画における位置付け

年間指導は、説話・歴史物語・日記・和歌・物語を扱い、様々なジャンルを用い、古文のものの見方・感じ方・考え方に親しめるよう計画している。(授業中、扱うことができなかった随筆については夏休みの課題とした)和歌に関しては、一学期に『宇治拾遺物語』一能は歌詠み一を扱い、和歌を詠ずることは、当時の人々にとって重要だったことを学習済みである。またこの後扱う『伊勢物語』では、本単元で和歌から物語を作ることにより、歌物語に対する関心が高まるよう期待している。また三学期に扱う『源氏物語』も和歌が物語に挿入されていることから、物語の構成や意味に和歌が重要な役割を果たしていることを学ぶ予定である。和歌に

親しむことで、我が国の伝統と文化を尊重する態度を身につけさせたい。

6 単元の指導計画と評価計画（六時間扱い）

授業同士のつながり

第一時で文献やインターネットを使用し、語句の意味や文法、歌の背景などを調べた。本単元の主たる目的は、和歌から物語を作ることだが、歌の意味を自由に解釈して創作を行うのではなく、語句や文法、歌の詠まれた背景や当時の状況や場面を理解した上で行わなければ、古典の授業で扱う意味がないために、この活動を取り入れた。またクラスの仲間の前で発表することから、いい加減な調べ学習ではなく、周辺知識等まで徹底的に調べることを期待してこの活動を取り入れた。また第三時で一人一人が物語の構成を考えることで、第四時に積極的活動に参加することを狙いとし、また第四時で、お互いの構成を知る事でより豊かな発想ができるのではないかと考えている。第六時の発表では、グループで考えた物語を劇として発表することで、より和歌の魅力を味わうことを期待している。

単元同士のつながり

前単元「日記に親しむ」では、「更級日記」を読み、短い文で日記を書くという学習活動を行った。これは、古典の文法や語彙を的確に理解するというところに重点を置きつつ、古典に親しむ態度を育てることも必要であることに留意した活動である。そのため、本単元においても、和歌を逐語訳から意訳し、さらにその和歌の前後の出来事を想像し、生徒が古典の世界に親しめるよう工夫した。また年間指導計画における位置付けに記したように、この後指導する『伊勢物語』および『源氏物語』にも本単元で学んだことを生かす予定である。

	学習活動・学習内容	学習活動に即した具体的な評価規準
第一時	三人のグループに分かれ、教科書「王朝秀歌」の語句の意味・訳・修辞等を調べ、ワークシートに記す。	ウー①
第二時	前時に調べたことや訳を全体に発表する。	アー①
第三時	全体の発表から、五・六人グループで和歌を選び、前後の物語の構成を考える。	イー②
第四時 第五時	グループで構成を持ち寄り、意見を出しながら和歌の魅力が伝わる物語（脚本）を作成する。	アー②
第六時【本時】	①グループで発表する。②発表を評価する。③自己評価し、学習を振り返る。	アー③ イー③

7 指導に当たって

- ①歌の語彙・文法・修辞・背景などを調べ発表することにより、和歌の内容を的確にとらえる。
- ②和歌の前後の物語を作成することにより想像力を伸ばす。

8 本時（全六時間中の第六時間目）

(1) 本時のねらい

和歌の魅力を伝えるために、歌の詠まれた前後の物語を創作し発表し合うことにより、古文特有のあるいは現代にも共通するものの見方・感じ方・考え方をとらえ、想像力を豊かにする。

(2) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入 8分	発表前の確認をする。 発表時間（約2分）で 練習を行う。	前時のグループワークの確認をし、2 分間の感覚を掴むよう指示する。	
展開 32分	グループの発表	<p>◆【発表者】聞いている人に物語の魅力 を伝えるための発表であることを理解 させ、指導する。</p> <p>◆【発表を聞く態度】発表者の意図は何 か、伝えたい歌の魅力とは何か、発表 の優れた点はどこか、等を考えながら 聞くよう指導する。</p> <p>【ねらいを達成するための具体的な指 導】物語を作成する際、以下の点に留 意させた。</p> <p>①グループで歌の魅力について話し合 い、共通の認識を得る。</p> <p>②歌の魅力を表現するための活動であ ることを意識させる。</p> <p>③物語を一文で言い表す。</p> <p>④登場人物を考え、性格や状況の設定 をする。</p> <p>⑤物語の構成を考える。</p> <p>【配慮事項】 人前で発表することに苦手意識を持つ 生徒については、演技以外の面（脚本 を書く・小道具を作成する）などの参 加でも良いことにし、グループの発表 の意図を理解し、活動に参加すること で評価の対象とする。</p>	イ 行動の観察 [グループの発表] グループで考えた和歌の 魅力を劇という発表形式 を通し伝えている。
まとめ 10分	<p>・発表の自己評価およ び他のグループの評価 をする。</p> <p>・優秀賞を得たグルー プのどこが優れていた かを考える。</p>	<p>・机間指導により、記述不足の生徒を 指導する。</p> <p>・机間指導で番号を集計し、代表的な 意見を抽出しておく。</p> <p>・次時の予告をし、予習内容を確認す る。</p>	ア 記述の確認 [自己評価表] 他のグループ発表のど こが優れていたかを具体的 に記し、自己の発表を振 り返ることで、単元の学 習内容を自分なりに深め ている。

(3) 授業参観の視点

単元の目標と本時のねらいとの一貫性はあったか。

学習活動が、本時ねらいを達成するための活動となっていたか。

生徒の学習意欲を高める学習活動の工夫があったか。

王朝秀歌

雪の降りけるを詠める

②たけな 霞立ち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

紀貫之

(古今和歌集・春上・九)

④ 百首の歌奉りし時、春の歌

山深み春とも知らぬ松の戸に絶え絶えかかる雪の玉水

①しよじ 式子内親王

(新古今和歌集・春上・三)

⑤ 守覚法親王、五十首歌詠ませ侍りけるに

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空

⑥ 藤原定家朝臣

(新古今和歌集・春上・三八)

題知らず

皇太后宮大夫 俊成 女

⑦ 橋のほふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする

(新古今和歌集・夏・二四五)

⑧ 嵐の山のもとをまかりけるに、紅葉のいたく散り侍りければ

右衛門督 公任

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき

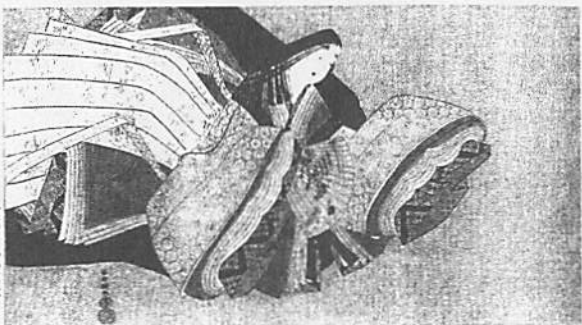
(拾遺和歌集・秋・二一〇)

題知らず

寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり真木たつ山の秋の夕暮

(新古今和歌集・秋上・三六二)



藤原俊成女 (新三十六歌仙図巻 狩野探幽筆)

○和歌の左の括弧内に示した番号は、『新編国歌大観』の歌番号である。

①紀貫之 「古今和歌集」の撰者で、『土佐日記』の作者。(八七二—九九四五?)

②霞立ち木の芽もはる 「はるは、張る」と「春」の掛詞。「霞立ち木の芽も」は、「春」の序詞になっている。

③百首の歌 正治二年(一一〇〇)の「初度百首」。

④式子内親王 後白河天皇の皇女。斎院となる。(一一四九—一二〇二)

⑤守覚法親王 後白河天皇の皇子。(一一五〇—一二〇二)

⑥五十首歌 建久九年(一一九八)ころ成立の「御室五十首」。

⑦藤原定家朝臣 俊成の子。「新古今和歌集」「新勅撰和歌集」の撰者。その日記に「明月記」がある。(一一六二—一二四一)

⑧夢の浮橋 夢のはかなさを浮橋にたとえた語。浮橋は、舟やいかだをつなぎ、上に板を置いて橋としたもの。「源氏物語」の最後の巻名。

⑨俊成女 俊成の孫で、その養女となる。(一一七一—一二五二?)

⑩昔の袖の香 「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(「古今和歌集」夏 よみ人知らず)を本歌とする。

⑪嵐の山 嵐山。今の京都市西京区、大堰川西岸にある山。

⑫公任 藤原氏。「和漢朗詠集」の編者。(九六六—一〇四二)

⑬寂蓮法師 俗名、藤原定長。「新古今和歌集」の撰者となったが、完成前に没した。(一一〇二—一一二〇)

⑭真木 杉、榎などの常緑樹。

文法の要点 「花ぞ散りける」(七〇・二)の「ける」の文法的意味を答えよ。

和歌所の歌合に、湖辺の月といふことを

⑨ 鳩の海や月の光の移ろへば波の花にも秋は見えけり

(新古今和歌集・秋上・三八九)

藤原家隆朝臣

題知らず

⑩ 津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風渡るなり

(新古今和歌集・冬・六二五)

西行法師

5

①和歌所の歌合 建永元年(一一〇六)

七月に催された歌合。和歌所は勅撰集の編纂などをすする所。

②藤原家隆朝臣 『新古今和歌集』の撰者。(一一五八―一二三三)

③鳩の海 琵琶湖のこと。

④波の花 波を花に見立てた歌語。「草も木も色変はれどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」(『古今和歌集』秋下 文屋康秀)を本歌とする。

⑤西行法師 花月を愛し、諸国を旅した歌人。家集に『山家集』がある。(一一八一―一一九〇)

男に忘られて侍りけるころ貴船に参りて、御手洗川に螢の飛び侍りけるを見て詠める

⑪ もの思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

(後拾遺和歌集・雑六・一一六二)

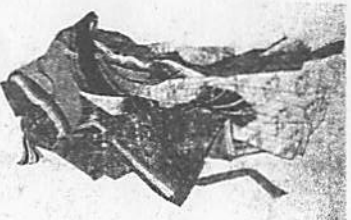
和泉式部

題知らず

⑫ 色見えて移ろふものは世の中の人心の花にぞありける

(古今和歌集・恋五・七九七)

小野小町



俊成

小野小町(佐竹本三十六歌仙繪)

⑬ 思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る

(新古今和歌集・恋二・一一〇七)

⑭ 田村の御時に、事にあたりて、津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮の内に侍りける人に遣はしける

在原行平朝臣

⑮ わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ

(古今和歌集・雑下・九六二)

10

生没年未詳。
⑫小野小町 六歌仙。仁明・文徳天皇朝(八三三―八五八)ごろの伝説的な歌人。生没年未詳。

⑬俊成 三六ページ注③参照。

⑭田村の御時 文徳天皇(在位八五〇―八五八)の御代。

⑮事にあたりて ある事件にかかわつて。具体的には不明。

⑯須磨 今の神戸市須磨区の地。

⑰在原行平朝臣 業平の兄。(八一八―八九三)

⑱藻塩たれつつ 涙を流しながら。「藻塩たる」は、製塩のために海鹽に潮水を注ぐこと。

文注の要点

「鳩の海」(七二・二)の「や」を文法的に説明せよ。

移ろふ ながむ わぶ

王朝秀歌 〳和歌から物語を作る〳

クラス
番号
氏名

グループで選んだ歌

大意

この歌の魅力

一文で物語を表現すると……

登場人物およびその設定（性格・身分・立場など簡単に）

構成

- ・ 伝えたいことをどう伝えるか工夫する
- ・ 話の順番、展開を考える
- ・ 箇条書きでよい

--

王朝秀歌と和歌から物語を作る

クラス
番号
氏名

- 評価の観点
- ①和歌の魅力が伝わる表現になっていたらか
 - ②想像力豊かに前後の物語を作成し発表できたか

◎ 該当する ○ やや該当する △ 努力を要する

1	②	①	「わくらば」 宮永太田猪森 波邊立石
2	②	①	「もの思へ」 山内宮川唐 澤柏木川鍋
3	②	①	「橋の」 森田象野岡部 金子所司有地
4	②	①	「わくらば」 木村安富 梅垣大貫佐々 木井上
5	②	①	「もの思へ」 深堀中野竜澤 野口高橋坂本
6	②	①	「思ひあま」 中島増山鈴木 大代西川清水
7	②	①	「色見えて」 野村小松塚田 高松山野
8	②	①	「色見えて」 平野由利熊笠 元堂長谷川松

各班的発表後に記入
すべての発表が終わったら記入

総合評価

--

発表の優れていた点

--

自己評価

- ・グループ活動に積極的に取り組んだか。()
 - ・歌の魅力を考え、伝えようとしたか。()
 - ・想像力を働かせ、前後の物語を考ええたか。()
- 自己評価自由記述
- ・発表までの自己の役割は何か。
 - ・学習活動の中で困難や戸惑いを感じた点。(あれば記す)
 - ・学習活動を振り返り考えた事、感じたことは何か。